

学校だより



はと広場

教育目標 進んで学び 高め合う 北小の子
あかるく なかよく すこやかに

1月号 令和8年1月8日 NO.9

さいたま市立北浦和小学校

〒330-0074

さいたま市浦和区北浦和2丁目18-3

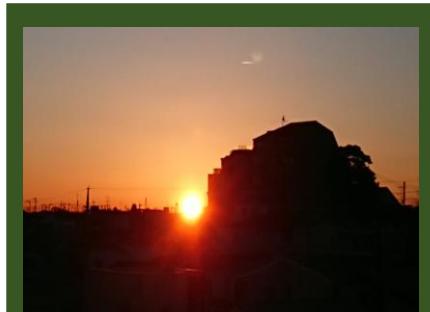
電話 048-831-2463 FAX 048-835-1352

【児童数】820名 【学級数】29学級

新年の空気を纏う ～丙午を迎えて～

校長 引間 陽子

今年は令和8年、2026年。丙午の年は、十干十二支の組合せで干も支も火の要素を持つため「太陽のように強く、情熱的でエネルギーッシュ」とされる干支のようです。飛躍のチャンスの縁起を担いで、よい年になりますようにと願います。



新しい年の日の出

新年の空気を「纏う（まとふ）」と心に決め、大晦日、元旦等の節目にお参りに出かけて、新しい年への願いを込めたり1年の感謝を伝えたりと手を合わせて拝むと、ある種の特別な雰囲気や気配を感じ、神秘的な気持ちになります。

文学の中でも「纏う」という言葉は使われており、水原秋櫻子（みずはらしうおうし）氏の俳句に「冬菊のまとふは己が光のみ」があります。冬菊を季語とし、冬菊が自分自身の光だけを纏い輝いている情景を詠んだ代表作です。自分自身の内面的な輝きや「己が光（おのがひかり）」という他者に左右されない、自己の存在感を表現した名句として知られています。「まとふ」という言葉に秘めた思いが伝わります。夏目漱石（なつめそうせき）氏の短編小説『幻影の盾（まぼろしのたて）』の中でも「纏う」が使われているのです。イギリス留学中に着想を得た7編の短編集『倫敦塔・幻影の盾』に収録されているものです。漱石文学の幻想的・詩的な世界観が展開され、『草枕』などに繋がる作品として位置づけられています。その一節に「纏う」が使われ、謎めいた妖艶な雰囲気を出しています。この「纏う」という言葉は、身に纏う、ツタが壁に纏う、気品を纏うなど、優雅な印象を与える言葉と感じます。気配の漂い方など、より深みのある情景を描写することに適した言葉だと思います。

一年の計は元旦にありと捉え、新たな空気を纏いながら、ポジティブ空気を創り出せる3学期にしたいと思います。挨拶も、その一つです。

「あかるくあたたかくいつでもさきにすすんでづけよう」を続けてきた北浦和小の1年間の集大成です。2学期に2週間実施した代表委員による“あいさつ運動”は効果絶大となりました。皆様、3学期もよろしくお願ひいたします。

水原秋櫻子氏の俳句

文学の中の「纏う」の世界

まとう

冬菊のまとふは己が光のみ

夏目漱石氏の「幻影の盾」より

盾には創がある。右の肩から左へ斜に切りつけた刀の痕が見える。玉を並べた様な鉢の一つを半ば潰して、ゴーゴン・メジユーサに似た夜叉の耳のあたりを纏う蛇の頭を叩いて、横に延板の平な地へ微かな細長い凹みが出来ている。